

《現地報告》

丹波の谷間の農の暮らし

橋 本 昭*

昭和47（1972）年頃のことでしたが、大学院に籍をおきながら「飲み屋」をやっておりました頃、美山町在住のひとりの林業家に会いました。いろいろな客が出入りする飲み屋においても、ひととき魅力的な人柄でありました。そんなことがあって、何回か美山町を訪問させていただき、その風土と人に「人が生きる背景は自然にあり」と、痛打されるような衝撃をうけたのです。そろそろ飲み屋のような消費の場ではなく、生産の場でなんとか生命を燃焼させたいと考えている矢先でもありましたから、ぜひ私を受け入れてくれるような場所を探して下さいとお願いをして、現在の胡麻の地を紹介されました。紆余曲折はありましたが、結局そこについて今日に至っているわけです。

その頃は、すでに大学院の方に出席することもほとんどなくなっており、継続の意志について事務の方からの問い合わせがあったのを契機に、自然に除籍ということになってしまいました。それ以来、全くアカデミズムの世界とは無縁であります。

もう20年間も、まとまった文章を書くことの必要がない誠に有難い生活を続けておりますので、意を尽くす文章を書くことも難しいとは思いますが、今日までを振りかえりながら、小さな農業の現場の声をお届けさせていただきます。ご参考になればたいへん有難い次第です。

1. 自給自足の生活の出發
私が生活しているのは、正しくは京都府船井郡日吉町上胡麻仏原というところの小さな谷です。あとで聞いたところによりますと、私よりも前に何人かの人がこの谷に住んでいたことがあるそうです。いずれも小屋掛け（炭焼小屋）であったり一時の避難住居で、ちゃんとした家（小さなものですが）を建てたのは私が初めてだそうです。そんな丹波準平野の谷の中に、最初3反5畝の田を買い求め稲をつくり野菜をつくる生活を始めたわけです。当初は電気もガス

*はしもと あきら、自営農

もなく、京都との往復のために車は持っておりましたが、山歩きの延長のように薪を燃やして飯ごうで飯を炊き、ランプを使っての生活でした。1年くらい後に家を建てるまでは、貰ってきた孟宗竹を縦割にしたものをフレームにし、農業用ビニールを張って住居としておりました。村の人々からは怪しげな目で見られたものです。いまだに村の人々と飲むような機会があると、「今でこそ、こうやってあんたと酒飲んだり話したりするようになったけど、ビニールハウスで寝とらはるころは村もんが怖がったり心配したりしよったもんやで」とよくいわれます。小川で釣った魚や灌漑用水池でタニシを捕ってきて食べたり、また種を蒔いて初めて収穫したいろいろの野菜に深く感動したり、秋の日差しが脱穀する籾を輝かせ思わず両手に受けてしげしげと眺めたりしたものです。今思えばナスもトマトも貧弱な出来であったように憶えています。その実った果実は私にとってはズシリと重いものでした。塩・醤油、少量の海産物ぐらいを購入するほかは、ほとんど金も使わないといったことを何年か続けました。生活の基本態度（指向性）は今もさほど変わっておりませんが、近年ではその頃に比べて消費生活が随分と豊か（墮落？）になってきております。

その当時、この胡麻の地域では耕うん機がやっと普及し、牛が姿を消しつつあった頃のように聞いています。村では、それまで6～7反の田で稲作をするだけで、あとは少し芋を作ったりしていれば家族が生活していけたそうです。もちろん食べ物も塩とか海産物を行商から少し買うだけで、柿を栽培し木綿の布疋なども作り、そして服を縫いワラジもなうといった暮しで、出費もごく少なくてまにあったそうです。

全国どここの農村も同じでしょうが、発動機・耕うん機そしてトラクター、田植機、バインダー、コンバインへと機械は発達し大型化してきて、その変化とともにテレビ、洗濯機、自動車その他の家電製品はもちろんのこと、暮しの雑貨一般が自家製ではなくなりはじめ、村の生活も生活費がたくさんいるようになってきました。米だけを作っている間に合わなくなってきたのです。生活に必要なもの、あるいは文明の楽しみのために金を使うようになると、必然的に別の稼ぎ口を求めなければならぬようになりました。うまい具合に高度経済成長下で街には仕事が沢山あり、家の大黒柱が電車（山陰線）に乗って亀岡へ京都へと勤めるようになったのもこの頃だそうです。

百姓仕事の手がなくなってくるのと機械の発達は平行していて「よう仕事する機械でっせ、人頼んで日当払うより安上がりです。人に頼んだら頭下げたり文句言われたりせんならんけど、機械は黙って仕事しまっさかいなア」という

ことになります。確かに人力などに比べたら楽々と仕事をしますが、ひとつだけ落とし穴があって、それは金がいるのです。おそらく、それまでのこの村における出費に比べれば法外な金額の金が動き始めたのでしょう。苦しいながらも稼ぎに出ればその機械の代金もかろうじて支払えるようになります。しかし、稼ぎに出ると時間がたらず、すばやく田畑の仕事をしなければならぬので機械への依存度は高くなり、もはや機械がなくては考えられない状態にまできていました。それと同時に、手間のかかる草取りを解決するため、品質向上のため、収量増のために大量に除草剤・殺虫剤・殺菌剤が使用されるようになったようです。そして化学肥料の大量使用もです。主にはこれら機械と肥料と農薬によって、さらに品種改良や耕地の整備、特にこの地方に多かった「しる田」が灌漑用水池を造営したことで「乾田化」が可能になり、これらの複合的効果で収量も増加したし労働も軽減したようです。

そんな地域の背景の中で私の生活が始まったわけですが、すでに述べましたように自給的な農的暮しを求めてこの谷に入ってきた私の農法は、地元の人々にとっては時代逆行の方法であったようです。「橋本はんは明治時代の農業をやろうとしてはんのか？」と明治生まれの古老に笑われたものです。牛こそ使いませんでしたが、トラクターになろうとする時に耕うん機でよしとするし、薬は使わないし化学肥料も使わず、すべてにわたって「自給的」であって「産業的」ではなかったからです。当時はまだ有機農業という言葉も特には使われなかったように思いますし、考えとしても整理されたものではなかったと思います。その頃、私の考えの中心は自給自足に基づくユートピア作りにあったように思います。「農業汚染・公害」からではなく、「自給的」であるために化学肥料も農薬も使いたくなかったのです。不作も病気もそのまま「自然」として受け入れるような姿に理想を見いだしていたような気がします。雇用・被雇用の関係から発生するさまざまな問題を「自給自足の農的暮し」で解決しようとしたのだと考えております。

その後の経過から判断するに、「時代」の流れに逆らうことはたいへんに難しく、この試みは短期・個人としては成功しても、長期あるいは家族・社会に広がると失敗に終わりました。大量生産・大量消費→高度経済成長の暴流に減速はできてもストップはかけられないからです。昔のように自給的な暮しをしていれば死ぬことはありません。しかし、いったん車を導入し、耕うん機を入れるとそれの支払いのためにお金を作らねばなりません。それは農産物を売って得られるものに対して非常に高価なものです。そして生活消費の面でも他の

一般の生活とあまりの格差がでると、子供も子供同士の付き合いの中で問題が発生し、仲間にいれて貰えなかったり、情緒面で問題がおきたりします。子供に持たせる弁当の飯が玄米であるだけでも、白い米の飯を持ってきている子供との間に摩擦をおこさせます。私の子供の場合、保育所の保育さんが優秀な先生であったためうまくとりなして下さって、かえって玄米に興味を抱く子供さんが増えたとも聞いています。しかし、ワラジでも履いて学校へやらせようとするれば、まず子供がいやがるだろうし、学校へ行っただとしても友達になんと騒がれるか想像のつくところですよ。最近はその程でもありませんが、当時は他所のヒトやモノを知らない閉鎖的な地域（田舎）でしたので、少しでも人と違うものがあつたりすると大騒ぎになったものです。他所の土地（私の場合は京都）から来た者にとっては、子供が地域に馴染むようにすることに結構気を使いました。

私個人としての自給自足の農的暮らしの理想はいまだに健在で気に入っています。手・足・頭の働きが太い糸でつながっていて「生きるも死ぬるも安心」といった不思議な気分の良さがあります。しかし今の世の中はすべてが仕事→金、消費・遊び→金と、すべて一回金に換えて計られます。そこでは金の操作によって「暮らし」や「生きがい」までもが操作を加えられます。「地獄の沙汰も金次第」というのがありますから何も今に始まったことではないのかもしれませんが、お金を通じないで直接に土やお日さんや水に働きかけて、そのまま木や草や虫や鳥や他の動物たちと同じ様な「いのち」として暮らすのが理想です。今となれば別段、車社会がよくないとかテレビ文化はちょっと困るなど、あまり言う気はありません。それらもまた、よろしかろうといったところですよ。しかし、それらとそれらの価値観によって、「いのち」として暮らすことを目くらまさせられるのは不快なことですよ。人と人の関係も「仕事上」のとか、「義理で」のとかではなくて、「いのち」の響き合としての暮らし合いを望むものです。

2. ゆるやか 私が胡麻の地に生活を始めて3年目くらいに、京都時代の友達2～3人と話
なサンガ(求 ができて一緒に百姓仕事をしようということになりました。そこで屋号を「地
道者の共同 湧舎」と名付けました。これは、しばらくお寺で修行をしていた頃に、毎日読
集団)を求 んでおりました法華経の第十五に「従地湧出品」というのがあって、その中に
めて 地湧千界の菩薩というが出てこられる場面があります。永遠の命を持った本
仏である仏様が多くの弟子たちにその法華経をお説きになられたところ、聞いて
いたものは大いなる喜びを感じて、猊尊に「なんと素晴らしい教えなのだ、

この教えを我々こそが後の世に伝えましょう」と申しでるのですが、釈尊はそれを制止され、その直後地面が割れて無数の菩薩様たちが湧きだして虚空中に並ばれる。そして久遠実成の釈尊が「我には数えきれない昔からの、数えきれないほどの教えを聞いてきた者があり、これらの者はすでに如来の知恵を得ている。これらの者こそがこの法華経を後の世に伝えるのだ」云々、といったくだりがあるのです。この雰囲気印象的で、自然に従って生きる者、生きようとする者こそ地湧の菩薩ではないかという勝手に解釈によってその名を頂きました。もっとも、仏教での解釈ははるかに唯心論的で、私のとったような解釈はお叱りを受けるすじのものだと思っています。

この地湧舎に出入りしていた人たちの心の底辺には例外なく「自由」を求めて、「管理」や「疎外」や「都市化」や「近代化」へのレジスタンスがあったように思います。時には、社会批判や思想宗教論に熟中して草取りをおろそかにしたようにも憶えています。対外的には自給自足を旨とする我々の趣旨に賛同いただく方を募って、京都を中心に約100軒分くらいの野菜を配らせていただきました。これは販売というのではなくて月会費のような形にしてもらって、会員さんもよくこの地に来られ、こちらからは夏場は週2回、冬場は1回野菜を配達させてもらう、といったスタイルでした。そして、作付可能なありとあらゆる野菜を手くそながら作りました。大人5～6人の共同生活のようなもので財布も一つといった形で始めましたが、やがてそれぞれに子供が生まれたり故郷の父母の面倒をみなげなければならなくなったりして、現実とのズレが大きくなり、また人間関係をうまくこなせなかったりして4～5年で崩壊してしまいました。

いつの間にか耕地は所有地6反、借入地1町5反の合計2町歩以上にもなっておりまして。時代は食料増産の時代から過剰・減反へと推移していたわけです。私の耕す谷は村から小さな峠を一つ越えての「出作り」の田であったところですが。農業の担い手の高齢化が進むにつれて、不便で出来の悪い田は切り捨てられていきました。どうにも稲作りの出来ない山田は杉が植えられて山に戻りました。そして、木を植えるわけにいかない田（日陰になるので谷の最奥の田しか植林できない）は小作に出されたわけです。私の住みついた谷は、ちょうどそうしたところに位置して小作に出されることが多く、それを引き受けるかたちで借入地が次第に増加してこの面積にまでなったわけです。この保戸原という谷はその昔、他の胡麻の地が旱魃の害を受けやすい土地であるにもかかわらず、この谷だけが水が多く日焼け（旱魃）に強かったので、上胡麻の村の



写真 保戸原の谷の水田

人々が細かく分けもって耕し早魃に備えていたようです。しかし灌漑用水池の整備とともにその心配も薄らぎ、手ばなしやすい状況にもなっていたようです。

ともかく、その2町歩以上の耕地を守りながら農業をするという立場に立たされ、仲間も散ってしまって困ってしまいました。これだけの面積にもなると自給自足などという優雅なものではなく、もう立派な「農業」の面積です。しかも農業経営として考えると効率の悪い生産力の小さい2町歩の田畑です。

地湧舎の時代にも夏休みに子供たちを集めてサマーキャンプのようなことをやっておりましたが、ちょうどその頃、京都の進学塾をやっている人との出会いがあって「受験のためだけの塾では満足できず、松下村塾や適塾のようなものを夢想している」、「豊かな自然の中で何かやってみたい」という申し入れがありました。私もたいへん困っていた時期だったので、私の方は地湧舎以来の蓄積と地所を提供することとし、先方は建物を新たに建てるなど出資をしてくれることになりました。私の自給自足、農的暮らしを理解していただき、かつ子供たちを中心にその塾の理事長を始めとする講師諸氏と一緒に仕事ができるというので、大いに息を吹きかえました。

私がこのような自給自足的な生活を夢みて、ここに足を踏み入れてすでに20年の月日が経ちますが、その間に世間の様子も随分と変わりました。概して言えば文明としてはいよいよ「土」から離れて「近代化」、「情報化」し、すべて

が「経済合理性」、「効率」、「システム」などに包摂されるようになり、「いのち」の周辺にあるドロドロしたようなもの、あるいは「土」の持つ雰囲気のようなものが、スポイルもしくはネグレクトされて来たように思われるのは私一人の偏見でしょうか。その反動もしくは反証のようにして「自然農業」、「有機農業」とか、「感性」の意味などがクローズアップされてきたように思います。

地湧舎としての活動が頓座してしまったとき、ちょうど出入りしていた人に京都の方で有機農産物を出荷して会員に供給しているセンターを紹介していただき、爾來、今日もなおこれに関わらせていただいております。この会も工業化社会に警世の鐘を打ち鳴らし、都市市民に食料消費に付いての啓蒙的な活動をしてこられ、今年20周年だそうです。私は、特に有機農業とか工業化社会批判を表だした運動として出発していなかったのですが、頭をもたげて世間を見わたせば、数は少ないけれど似たようなことを考えている人々がいたんだと気づかされました。そんなわけで、ここの農的営みによって生みだされる産物は、そのセンターを通じて消費者である「食べ手」に渡るようになりました。

一方で、塾の子供たちを中心に「体験合宿」なども続けていて、両面にわたって生活領域に広がりを持つようになりました。塾との合同を機に、屋号も「地湧舎&コスモスファーム」と改名しました。こうして、農作業、子供たちの体験教育のプログラム作り、また未経験者に対して農業研修のできる農場としての多様な機能を今日、果たすようになってきております。

3.アグロス 子供たちの合宿の賄いをするために、村の婦人の方にパートとして来ていた
胡麻郷のこと だくという形でお付き合いが始まり、今日では村人たちとの付き合いも徐々に深いものになってきております。京都の方へ「朝市」に出かけたり、宝塚の方と町行政を仲立ちに交流をつくって、オバチャンたちと一緒に野菜を持って売りに出かけたりました。

そうこうしているうちに、この日吉町にある鍼灸の大学に付属病院ができ、その栄養士さんが私の知人を通じて、入院患者さんのための食材として有機野菜を納品してもらえないだろうかという問い合わせがきました。街の方では有機農業とか無農薬農業とかが結構騒ぎになっており、自然保護・環境破壊などが取りざたされている割に、田舎では（この地域だけかもしれませんが）一部に有機農業といって街の人向けに米・野菜を作っている農家はあったものの、「ある種の商品」作りの域を出ていなかったことが私には気にかかっていたので、これはいい機会をいただいたと、村の人々に声をかけてグループをつくっ



写真 生産組合の共同作業風景

たわけです。このグループは「アグロス胡麻郷」と名付けました。15から16軒の農家が関わり、当初は病院も開院直後でキウリを3本などという注文をよこしたりするうち、幸か不幸か患者さんもだんだんと増えて、今では結構な集荷量になっております。

これを契機に、私の自給論は個人の域をでて地域自給へと展開してくるようになりました。その2年後には地域の小学校給食の野菜、また2年ほどして米の地場供給へと発展していきました。そして、1991年の冬には大阪の方の有機農産物を扱う業者から声がかかり、さらに多くの作付をするようになるとともに、任意ではありますが生産者の組織も「農業生産組合アグロス胡麻郷」と改変し、加入者も35軒以上となり耕畜連携もうまく進んでおります。作付の調整・栽培技術、どうしたら農薬を使わずに一般並の作物が作れるか、出荷の調整、生産者の高齢化、後継者難など、多くの問題を含んではおりますが、地域自給と他所へのお荷のバランスをとりながらエッチラオッチラという毎日であります。農業研修者として入ってきてくれた人も少しは定着し、村の人々とも一緒にこのアグロス胡麻郷の動きに参加し、よそ者と地元の壁もなんとかしのぎながら進んでおります。一方、体験実習農場としてのコスモファームの方も充実の必要があり、仕事は山積みの状態です。

こうしていつのまにやら、すっかり村の中に入りこんでしまった今日この頃ですが、中山間地として分類されるこの地域で、これからも私はやはり農業を中心に暮らしが展開してゆくことを望んでいます。しかし、いろいろな活動を通じて今、「農業」という言葉にこめられた意味あいに大きなズレが生じていることに気づきます。「農的暮らし」と「産業としての農業」の間の格差といってもよいのです。そして、この谷間における私の考える農業が、果してこれらどちらの選択肢を選ぶことになるかということになると、なかなか難しいところだと自覚しています。理想とする「農的暮らし」も、ここにまで押しかけてくる近代工業的発想にもとづく諸般のしがらみと、それだけでは家族も十分には養えないという自虐的なもどかしさがある、こうした山間の村でさえもそうした生活がつぶれかけています。

一方では、もう言うまでもないことですが、農政は産業としての農業に変換するために30年以上の歳月と巨大な量の金（税金）を使ってきました。そしてほとんどの農産物（食べ物）の輸入自由化を認め、「米の輸入自由化」すら怪しい状況になっています。米の自由化が実現した暁には、日本の「産業としての農業」の大部分でさえも簡単につぶれることは、火をみるよりも明らかで、私たちのこの丹波の小さな村などはひとたまりもありません。「農的暮らし」も「産業としての農業」もままならないとしたら、どうしたらよいのかと思悩むことも多いのです。

もうこうなったら、こうした流れは「農業問題」の域を越えて、「人間の生存」の問題であって、ひとりの農業者としては自然の行く末を考え、民族の未来を憂えるなどといえれば格好はよいのですが、ほとんど、どうしようもない無力感に陥ることもしばしばです。

泣き言になりましたが、大きいことは言えてもできることは小さいのです。ほんの自分の身のまわりのことしかできません。こんな思いで日々の仕事をこれからもしてゆきたいと念じておりますが、なかなか難しいことが多い日常です。アグロスの生産も特産品作りとか産地形成ではなく、多品目少量作付でなるべく自然な栽培を、そして地場供給型を基本としています。まだまだ不十分なのですが、コスモファームは耕作とともに農的暮らしの体験やこういった問題の論議・検討の場として、また同士の者の出会いの場として解放してゆくつもりです。

4.まとめ

以上たわいもないことを脈絡もなく書きまして、貴誌を汚したのではないか

と恐れている次第ですが、読者の皆様に農村の現実の一端を知っていただく上の参考になり得たとしたならば幸いに思っております。

農業基本法立案のリーダーシップをとった東畑精一博士は晩年のある会合で、次のように述懐されたそうです。「経済の高度成長の過程で、農村の環境は大きく変わった。私は農業基本政策の相談にあずかってきたが、私の考え方に誤りがあった。それは私の学問に生活の視点が欠けていたことである。これは学者として私の不明のいたすところで、今後私は筆を折らなければならない」。今、「21世紀農政プラン」なるものが農水省より出され、農業基本法に輪をかけて、生活不在の方向がうち出されているように思われます。この小さな村々をどうしようと考えているのでしょうか。こうしたデスクプランに賛成の論などをはられる人たちに申したいのですが、私たちの死活にかかわることであって、筆を折るだけではとてもすまない筈です。

国際経済とやらの中で日本の農業を経済合理性の立場だけからアプローチするとすれば、刺身のつま程度に環境保全を称えても少々の毒は「つま」で消せても大きな毒は消せません。昭和35年頃以来、アジア温帯モンスーンの日本はすでにその風土を無視して農的なところ、すなわち自然を畏れ育くむところを失い、大量生産、大量消費に身をやつし使い捨てに狂奔乱舞し、当然の不況に泡を食い、なすすべを知らない現状のようです。消費文化に狂喜し、なおこの上に何を上乘せしようというのでしょうか。現地農村ですらその疾風怒濤に巻きこまれ農法も村社会も暗澹たるのもであります。農村にも「農」のところが失せようと思えています。

工業加工貿易の自転車操業国日本は、そろそろGNPの夢から醒めてよい頃ではないでしょうか。自然を畏れ、自然に寄り添い、自然に学び、とりわけ自分の心の自然を感じ受け、「死ぬも生きるも安心」の境地を再発見したいものと尽きせぬ思いしております。

追記

自分の周辺のことを一度整理したいと思っていたところ、こんな機会をお与え下さった「農耕の技術と文化」誌と渡部先生に深くお礼申し上げます。日常の生活のさなかにあると、いろいろ考えてはみますが整理する機会はなかなかありません。おかげで自らを振りかえる機会を得ました。貴誌の趣旨に見合ったものであるかはなほだ怪しいのですが、学問の世界を離れ農村に赴いた者の中間報告としてお読み下されば幸いです。